

# THE GRANPHONIC CONCERT 7th

グランフォニック 第7回定期演奏会

客演指揮に畑中良輔、朗読に伊藤京子 両氏をお迎えして…



2006年11月11日(土) 名古屋市民会館中ホール 15:30開場 16:00開演

## ご挨拶

本日はお忙しい中、グランフォニック第7回定期演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

前回の定期演奏会では名古屋公演に加え、東京公演という我がグランフォニック史上特筆すべきイベントを無事に終えることができました。これもひとえに皆様方のご理解とご協力の賜物と厚く感謝申し上げます。

その後団員も増え、50余名のメンバーで第7回定期演奏会を迎えることができました。

本日の「水のいのち」の演奏には日本音楽界の大御所、畑中良輔先生に客演指揮をお願いすることができました。その上日本のプリマドンナ・伊藤京子先生まで応援に駆けつけてくださることになり、団員一同、身の引き締まる思いで練習を重ね、この定期演奏会に臨んでまいりました。

又、ブラームスの「愛の歌」には今後活躍が期待できる学生さんをソリストとして公募・起用したことも新しい試みと言えましょう。

演出は昨年に引き続き岩川均先生にお願いし、特に「学生王子」では楽しいステージをお見せできることと思っております。

高校・大学の男声合唱団の活動が心配される中であって、これからも「歌って楽しく、見て楽しい」オンリーワン合唱団の路線を歩み続ける所存でございます。

「ご一同様、グランフォニックをご贔屓に・・・隅から隅まで、ずずずいっと

・・・お頼み申し上げ奉ります。」

グランフォニック団長 兼 コンサートマスター 田中良夫



## Die Neuesten Liebeslieder (愛の歌 最新版)

作曲：ブラームス

編曲：福永陽一郎

構成：グランフォニック

- |                                      |                        |
|--------------------------------------|------------------------|
| 1. Rede,Mädchen,allzuliebes          | (口を利いておくれ、とても愛らしい娘さん)  |
| 2. Am Gesteine rauscht die Flut,     | (岩に満潮の大波がくだけてどよめいている)  |
| 3. O die Frauen,                     | (ああ、女よ)                |
| 4. Wie des Abends schöne Röte        | (夕方の美しい紅のように)          |
| 5. Sien,wie ist die Welle klar,      | (ごらん、なんと波が透きとおっていることか) |
| 6. Nachtigall,sie singt so schön,    | (ナイチンゲールが美しく歌っている)     |
| 7. Ein dunkeler Schacht ist Liebe,   | (恋とは暗いたて穴)             |
| 8. Die grüne Hopfenranke             | (みどりのホップの蔓が)           |
| 9. Ein kleiner,hübscher Vogel        | (小さなかわいい鳥が)            |
| 10. Wohl schön bewandt war es        | (全くもってすばらしいものだったのよ)    |
| 11. Wenn so lind dein Auge mir       | (きみの目がそんなにもおだやかに)      |
| 12. Am Donaustrande                  | (ドナウ河の岸辺にね)            |
| 13. Nein,es ist nicht auszukommen    | (だめだ、上手くやっっていけない)      |
| 14. Schlosser auf,und mache Schösser | (さあ錠前師よ)               |
| 15. Zum Schluß                       | (終わりに)                 |

指揮：向川原慎一

ソプラノ：宮崎有希子

アルト：倉本 亜紗

ピアノ：早瀬 洋子

若杉 弘子

## 男声合唱組曲 水のいのち

1. 雨
2. 水たまり
3. 川
4. 海
5. 海よ

作詞：高野喜久雄

作曲：高田 三郎

客演指揮：畑中 良輔

朗読：伊藤 京子

ピアノ：早瀬 洋子

..... 休 憩 .....

## グランフォニック・ミュージカル 学生王子 ハイライト

作曲：ロンバーク

脚本・演出：岩川 均

編曲・構成：グランフォニック

指揮：向川原慎一

ソプラノ：毛利美奈子

ピアノ・チェンバロ：早瀬 洋子

## 合唱とピアノ連弾のためのワルツ集 愛の歌 最新版

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）はドイツ音楽の泰斗、バッハ、ベートーヴェンの衣鉢を継ぐものとして生前から高い評価を受けていました。その一方で、民謡に親しみ当時大流行していたウィンナーワルツにაცოგაれにも似た気持ちを抱いていたということです。

ちょうどその時代、ブラームスが生きた19世紀の後半になると、産業革命が行き渡り、豊かになった市民階級が、良き市民のたしなみとして家庭で音楽会を開いたり、サロンを作ったりして、自分たちの手で歌い、奏で、楽しむようになりました。そんな中で、1868年から69年にかけて創られた混声四重唱（四部合唱）とピアノ連弾という家族または同好の士の演奏にいかにもふさわしい《愛の歌》全18曲は、専門家よりもむしろ音楽好きの市民から自分たちの手で演奏出来る名曲として歓迎され、その好評に気をよくした出版社の薦めもあって同じスタイルの《新しい愛の歌》全15曲が1874年に作曲されました。

今回お届けする《愛の歌・最新版》は《愛の歌》作品52と《新しい愛の歌》作品65の中から福永陽一郎氏が男声合唱に編曲したものを中心に、原曲にある女声二重唱や混声四重唱などを加え、曲順を整えて歌うものです。

詩は、最後の1曲を除き、《ロシア、ポーランド、ハンガリアの舞踏歌集：ポリドーラ》よりゲオルク・フリードリッヒ・ダウマーのドイツ語訳によるもの、また最後の第15曲はゲーテの詩《終わりに》。これらはワルツ集といっても曲集として一定の物語があるわけではなく、愛の、恋の、また恋にまつわる様々な人生の一瞬が、3拍子のリズムによって歌われます。

3拍子、この中にブラームスはなんと多彩な表情を盛り込んだことでしょう。

- 1) 語っておくれ、ぼくの心に炎のような情熱を注ぎ込んだ娘さん。きみは打ち解けた喜びというものを知らないのかね。喜びを知らないなんて、そんなことはありませんわ。おいでください、星が輝く晩に。  
二人の会話、恋の芽生え、ワルツ集の幕開き。
- 2) 岩塊に激浪が打ち寄せる、こんな光景に呻吟しない輩は、恋のさなかに呻吟することになる。恐ろしい戒め。
- 3) 何と云ったってこの世は女。世に女がいなけりゃ、俺はとうの昔に坊主になっていたさ。ドイツ語が解らずとも、聴いていて何やら鼻の下がむずむずしてきたら、蓋し名演。
- 4) 哀れな小娘だって、真っ赤な夕日のように心を焦がし、思う男に好かれない。果てることなく喜びを撒き散らしたい。  
せつなくもウブな乙女心。
- 5) 澄み渡る水面のさざ波、空には月の光、夜の泉のほたり。再びぼくを愛しておくれ。  
よりを戻す舞台装置は完璧。
- 6) 春の夕べ。ナイチンゲールの美しい歌、煌めく星。暗闇で口づけを。  
ああ幸せ。
- 7) 暗い豎穴、恐ろしい井戸、それが恋。そんなところへ落ち込んで。  
恋とはなんとおぞましいもの。
- 8) ホップの蔓は地を這う。何故って、支柱がなければ天に向かって伸びていけない。  
美しい娘の心は重苦しい。何故って、愛する人が遠くにいれば楽しくなれるわけがない。  
これも恋する娘の切ない心。
- 9) かわいらしい小鳥が果物のたわわに実る庭へと飛んでいく。(ぼくも飛んでいきたいな。)そこには鳥もち竿の罟、哀れな小鳥は捕らえられ。(ぼくはどっこい、そうはしないさ。)でも、小鳥は美しい人のものとなり、幸せ者のかわいい小鳥は楽しく暮らしましたとき。  
(やっぱりぼくもそうするよ)  
小鳥は虎穴に入り、虎兇とむつまじくなったということか。

- 10) 結婚前は、それは素晴らしいものだった。あの人は壁10枚隔てていたってわたしを認めたわ。今ではあの冷たいやつは、わたしが目の前に立っていたって気付こうとしない。だれもが憧れる結婚、でも所詮人生の墓場ということか。
- 11) きみの眼が穏やかに、いとおしくぼくを見つめると、あれやこれやの悩み事は全て消え去ってしまう。こんな愛、情熱、無くなるな。ぼくのように誠実にきみを愛する男は他にはいないのだから。甘い殺し文句でずうずうしく迫る。
- 12) ウブな男の子達の会話。  
ドナウの岸辺の一軒家にさあ、素っ敵な娘（こ）が居るって。ところがその娘<sup>かんぬき</sup>たらとんだ箱入りで、戸口には鉄の門<sup>かぬき</sup>が10個も付けてあるんだって。  
何云ってんだ、そんなものはガラスと同じ、こっぴみじんさ。  
がんばれ、若者、あの娘をゲットするのだ。
- 13) ああ駄目だ、世の連中とは付き合っちゃられない。奴らと来た日にゃ何でもかんでも人のことを悪く云う。ぼくが陽気だと、邪悪な欲望を抱いていると云うし、静かにしていると色気違いだと云いやがる。恋する者に世間が嫉妬するのは世の習い。でも言われる方も内心悪い気持ちはしていないはず。
- 14) さあ錠前屋、立て。錠をいっぱい作ってくれ。奴らの口にみんな錠を掛けてやる。俺の悪口が言えないようにな。承前<sup>しょうぜん</sup>。人の恋路をおもしろがり、邪魔したくなるのはいつの時代でも同じ。
- 15) さてミューズの神々よ、もう沢山だ。あなた方は恋の苦しみと喜びが交錯する様を徒に描こうとするだけ。あなた方は恋の痛手を治すことはできない。とはいっても、ミューズの神々すなわち芸術が痛みを和らげることになるのだ。これは、ポリドーラの舞踏歌ではなく文豪ゲーテの詩。恋の達人ゲーテの箴言<sup>しんげん</sup>でワルツ集の幕。

K e .

## 男声合唱組曲「水のいのち」 作詞：高野喜久雄 作曲：高田三郎

「水のいのち」は作曲家高田三郎の合唱組曲の代表作であり、合唱経験者で知らないものはいないほど歌い継がれ、親しまれている名曲である。この組曲は近代フランス音楽の影響を受けた高田三郎の思いが蒸留、生成され、滴り落ちる純粋な一滴一滴からなる作品ともいえる。その純粋さ、優しさゆえ、歌うもの聴くもの双方に深い喜びと感動を与える作品である。その根底には高田作品が「初めに言葉ありき」と評されるように、詩に対する研ぎ澄まされた視点があり、この作品でも詩人高野喜久雄の理念、情感を一人の詩人の精神的宇宙としてすくい上げている。ここに音楽と詩が渾然一体となった“高田三郎の世界”が現出している。

### 1. 雨

降りしきれ 雨よ  
降りしきれ  
すべて  
立ちすくむものの上に  
また  
横たわるものの上に

降りしきれ 雨よ  
降りしきれ  
すべて  
許しあうものの上に  
また  
許しあえぬものの上に

降りしきれ 雨よ  
わけへだてなく  
涸れた井戸  
踏まれた芝生  
こと切れた梢  
なお ふみ耐える根に

降りしきれ  
そして 立ちかえらせよ  
井戸を井戸に  
庭を庭に  
木立を木立に  
土を土に

おお すべてを  
そのものに  
そのもののに

### 2. 水たまり

わだちの くぼみ  
そこの ここの  
くぼみにたまる 水たまり  
流れるすべも めあてもなくて  
ただ だまって  
たまるほかはない  
どこにでもある 水たまり  
やがて  
消え失せてゆく 水たまり  
わたしたちに肖ている  
水たまり

わたしたちの深さ  
それは泥の深さ  
わたしたちの言葉  
それは泥の言葉  
泥のちぎり  
泥のうなずき  
泥のまどい

だが  
わたしたちにも  
いのちはないか  
空に向う  
いのちはないか  
あの水たまりの にごった水が  
空を うつそうとする  
ささやかな  
けれども いちずな いのちはないのか

うつした空の 青さのように  
澄もう と苦しむ  
小さなころ  
うつした空の 高さのままに  
在ろう と苦しむ  
小さなころ

### 3. 川

何故 さかのほれないか  
何故 低い方へゆくほかはないか

よどむ淵 くるめく渦のいらだち  
まこと 川は山にこがれ  
きりたつ峰にこがれるいのち  
空の高みにこがれるいのち  
山にこがれて 石をみごもり  
空にこがれて 魚をみごもる  
さからう石は 山の形  
さかのぼる魚は 空を耐える

だが やはり 下へ下へと  
ゆくほかはない 川の流れ

おお 川は何か  
川は何かと問うことを止めよ  
わたしたちもまた  
同じ石を 同じ魚を みごもるもの  
川のこがれを こがれ生きるもの

### 4. 海

空をうつそうとして  
波一つなく 凪ぐこともある  
岩と混じれなくて  
ひねもす  
たけり狂うこともある

しかし  
凡ての川はみな  
そなたをさして常に流れた  
底に沈むべきものは沈め  
空にかえすべきものは  
空にかえした

人でさえ 行けなくなれば  
そなたを さしてゆく  
そなたの中の 一人の母をさしてゆく

そして そなたは  
時経てから 充ち足りた死を  
そっと岸辺にうち上げる  
見なさい  
これを 見なさい と云いたげに

## 5. 海よ

ありとある 芥  
よごれ 疲れはてた水  
受け容れて すべて 受け容れて  
つねに あたらしくよみがえる  
海の 不可思議

休まない 汀  
波の指 白い指 くりかえし  
うまず くりかえし  
億の砂 億の小石を 数えつづける  
海の不可思議

くらげは 海の月  
ひとでは 海の星  
海蛍 海の馬 空にこがれ  
あこや貝は 光を抱いている

そして 深く暗い 海の底では  
下から上へ  
まこと下から上へ  
雪は 白い雪は 降りしきる

おお海よ  
たえまない始まりよ  
あふれるに みえて  
あふれる ことはなく  
終わるかに みえて  
終わることもなく  
億年の むかしも いまも  
そなたは いつも 始まりだ  
おお 空へ  
空の高みへの 始まりなのだ

のぼれ のほりゆけ  
そなた 水のこがれ  
そなた水のいのちよ

たとえ 己の重さに  
逆らいきれず 雲となり  
また ふたたび降るとしても

のぼれ のほりゆけ  
みえない つばさ  
いちずな つばさ あるかぎり  
のぼれ のほりゆけ  
おお

JASRAC (出) 許諾第0606221-601号

### 畑中良輔：客演指揮

東京音楽学校卒業。宮廷  
歌手ヘルマン・ヴァーハー  
ペニヒ博士に師事。

リリックな声を持ち、その  
音楽的解釈力の深さと卓越した  
演技力は、デビュー当時より高い  
評価を受けてきた。特にオペラでは  
モーツァルト歌手として第一線に立ち、「魔笛」のパパ  
ゲノ、「フィガロの結婚」のフィガロをはじめ、モー  
ツァルトのオペラの本邦初演の主役の全てをつとめた。

イタリア・フランス・オペラでは、世界の名歌手、  
タリアヴィーニと「ボエーム」「ウェルテル」、ゲルハ  
ルト・ヒュッシュと「ドン・ジョヴァンニ」などを共  
演し、オペラ上演史に輝かしい記録を残した。

歌曲ではドイツ歌曲・日本歌曲に造詣深く、特に日  
本歌曲のプログラムで全国縦断リサイタルを行ない、  
啓蒙の役割を果たしたことは特筆に値する。



作曲の面では抒情的な歌曲作品が多く、「畑中良輔歌  
曲集」が全音楽譜より出版されている。

評論の面では40年にわたり朝日新聞の音楽評を書き  
続け、「演奏家的演奏論」「演奏の風景」「朝日試聴室」  
などの著書がある。

演奏家としては、これまでの録音を集大成した「歌  
の翼に。畑中良輔」のCDがビクターから発売されてい  
る。また、教育者としては弟子の多くのすぐれた声楽  
家たちが、日本はもとより世界で第一線の歌手として  
オペラに歌曲に活躍している。全日本合唱教育研究會  
会長、日本音楽コンクール運営委員をはじめ、多くの  
役職をつとめ文部科学省の教育過程審議会の重責をも  
担ってきた。

東京芸術大学名誉教授、慶應義塾大学特選塾員、初  
代新国立劇場芸術監督、藤沢市民会館文化担当参与、  
水戸芸術館音楽部門芸術総監督、昭和60年紫綬褒章受  
賞、平成2年毎日芸術特別賞受賞、平成6年勲三等旭日  
中綬章受賞、平成9年モービル音楽賞受賞、平成11年神  
奈川文化賞受賞、平成12年文化功労賞受賞。平成17年日  
本芸術院賞、恩賜賞受賞。

### 伊藤京子：朗読

東京音楽学校（現・東京  
芸術学校）卒。国立音楽大学  
名誉教授などを歴任し、静岡  
文化芸術大学客員教授、常葉  
学園短期大学客員教授。日本  
音楽コンクール審査委員を務める。



1949年、第18回日本音楽コンクール声楽部門第1位受  
賞後、「フィデリオ」でデビュー。恵まれた声と容姿、  
高度なテクニックと演技力でプリマドンナの地位を獲  
得。以来、多くのオペラでの主役を演じ、国内はもと  
より海外でも高い評価を得ている。

毎日芸術賞・芸術選奨文部大臣賞・紫綬褒章・日本  
芸術院賞・勲三等瑞宝賞・中日文化賞など数々の賞を  
受賞。

現在、(社)日本演奏連盟理事長、日本芸術院会員。

## グランフォニック・ミュージカル 学生王子 ハイライト

作曲者ロンバーグは1887年ハンガリーに生まれ、青年時代をウィーンで過ごした後アメリカに渡り、オペレッタの伝統にもとづくミュージカルで多くの名作を残しました。その美しい旋律は今日でも多くの人々に歌われ、親しまれています。

学生王子は、ドイツの劇作家ヴィルヘルム・マイヤーフェルスターの戯曲、《アルト・ハイデルベルク》により、ドロシー・ドネリーが台本を書き、ロンバーグが作曲したものです。1924年にブロードウェイで初演されるや、記録的な成功を収めました。

物語は、大学都市ハイデルベルクに留学した王子カール・フランツが、楽しい学生生活を送るうち、学生たちのアイドルである可愛いケティーと愛し合うものの、結局二人は結ばれずに終わるというものです。

中欧の小さな国、カールスブルクの因習と慣習が支配する古い宮廷の一室。王子の家庭教師エンゲル博士が遠い昔のハイデルベルクの学生時代を懐かしみ、喜びに浸っています。博士の薫陶よろしくハイデルベルク大学へ留学することになった王子、カール・フランツと共に再びハイデルベルクの土を踏むことができるからです。

時は麗しき5月、遠くでガウデアームスの歌声が聞こえ、新学期を迎えた学生たちはなじみの酒場に集い、学生たちのアイドル、ケティーを囲んでビールのジョッキを片手に、化学？生物学？そんなものは考えたくもない、ホメロス、キケロみんなくたばっちまえ！読書よりナンパの勉強、それこそ学問の真髄、と春のひとときを大騒ぎで過ごします。

そんな光景を先ほどハイデルベルクへ到着したカール・フランツ一行が呆然と見守っています。あのカビ臭く格式張った宮廷とはなんという違い。そこへケティーがやって来て、歓迎のしるしにハイデルベルクのバラを贈ります。また、めざとく新入生を見つけた学生たちからビールのジョッキを受け、盃に盃を重ね、宴もたけなわ。そのうち、酔った学生たちが、学生生活、それは何と云ったってお酒の魅力だよ、とクダを巻き、皆飲み疲れ、歌い疲れて眠ってしまいます。

その夜、興奮冷めやらず眠れぬ王子が庭へ出てみると、そこには台所仕事を終えたケティーの姿が。カール・フランツは先ほどの歓迎のバラのお礼にと、セレナードを歌い、ケティーもそれに応えて、「あなたこそ夢の中で星とバラに飾られた忘れられぬ人」と互いの思う気持ちを打ち明けます。

別れは突然やって来ました。大学の休暇、カール・フランツとケティーはパリへの小旅行を企てま

す。花の都パリ、あこがれの町パリ。まさに馬車に乗り込もうとするその時、祖国カールスブルクから急使が到着。国王陛下の病気が重篤なため至急帰国し、摂政としてまつりごとを行うよう、カール・フランツに告げます。カール・フランツは王子としての崇高な義務に従うべく、国へ帰る身支度にかかります。「ケティー、またすぐに戻るよ。陛下は直に回復なさる、国中の名医がついているんだ。博士もここで待っていてくれ、わずかな時だ。」悲しみをこらえて健気に身支度を手伝うケティー。しかしケティーにも博士にもうすうす解っていました、カール・フランツは二度とハイデルベルクへ戻ることはない。馬車は出発、悲しみに泣き崩れるケティー。

\* \* \*

と、今日のハイライトはここまでです。さて、物語はこのあとどうなるのでしょうか。国へ帰った王子カール・フランツは摂政の位に就きますが、程なくおじの国王は崩じ、国王に即位したカール・フランツと隣国のマーガレット女王との政略ともいえる婚約が発表されます。しかし、ハイデルベルクでの自由で人間味あふれる生活を経験したカール・フランツにとって、古い因習にとらわれ冷たく策略に満ちた宮廷での生活は耐え難く、思いはハイデルベルクへと募るばかりでした。

矢も楯もたまらず、特別列車を仕立ててハイデルベルクへ向かいますが、当地に残ったカール・フランツの良き理解者エンゲル博士は既に亡く、学生仲間も或る者は家督を継いで大領主に、或る者は教師にとそれぞれの道を歩んでいます。また、懐かしい酒場も今はさびれ、何よりカール・フランツが国王というとてつもない地位に就いたため、昔の仲間の

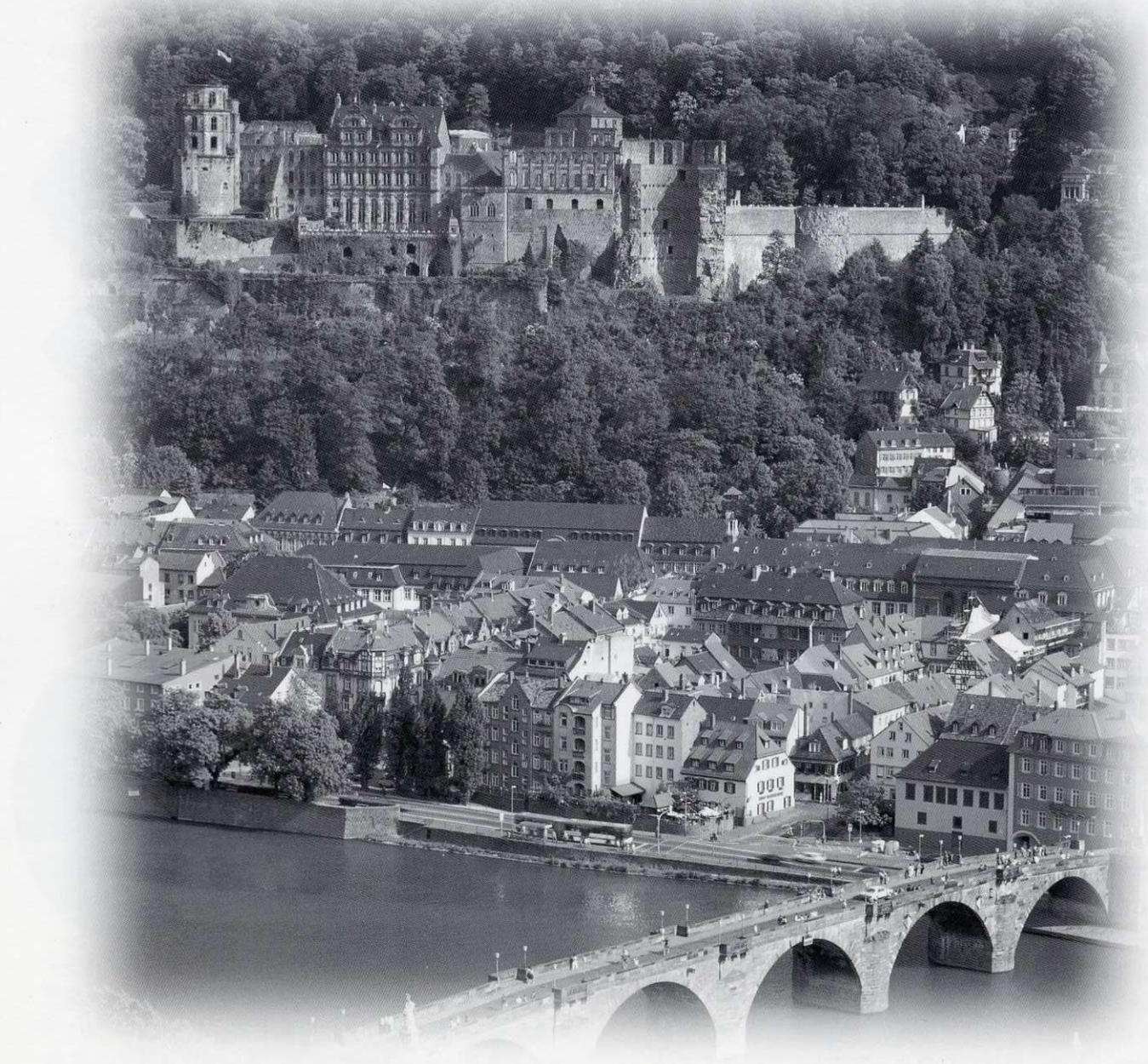
集まりもどこかぎこちなく仰々しいものになってしまいました。

そんな中で、昔と変わらぬ優しさといとおしさに迎えてくれたケティー。カール・フランツは、やっと安らぎを見出しますがそれも束の間、ケティーも秋には遠くへ嫁いでいく、しかも親戚が決めた一回り以上も年上の平凡な人のもとへ。絶望にうちひしがれ、帰国の途につくカール・フランツに、ケティーは張り裂けそうな胸の内を抑えて、ためらいがちに言います。

「カール・フランツ、国王陛下！どうか悲しまないで。わたしのような者にはよく解らないけど……国王様って、しゃんとしなければいけないんですよ、皆の幸せのために。そう、しゃんと。この間、新聞でマーガレット王女様のお写真を拝見したわ。とてもお奇麗なお方。どうかマーガレット様を大切に、仲良く暮らしてくださいね。皆の……皆のために……」

永遠の別れ。 —全編の幕—

K e .



PROFILE



岩川 均：総合演出

1974年頃より名古屋で舞台活動。以後俳優として出演の舞台多数。なかでも名古屋弁喜劇「フィガロの結婚」の伯爵役、ミュージカル「ファンタスティックス」のエルガヨ役は再演を重ねた。

1985年、天野鎮雄、山田昌らと「劇座」を結成、俳優としての出演の他、名鉄ホールでの「やっとかめ探偵団」シリーズなど数多くの演出もつとめる。

劇座外ではTVドラマ出演や瀬戸市民オペラ「民吉」など音楽関係の舞台の演出も多数。また、円形劇場ちくさ座での演出・出演、オペレッタ「夏の夜の夢」出演、オペラ「カルメン」演出、グランフォニック第6回定演での「メリーウイドー」の構成・演出など。



向川原 慎一：指揮

早稲田大学第一政治経済学部卒業。在学中及び卒業後に指導在籍した男声・女声・混声合唱の多くの合唱団で指揮や演奏に経験を重ね、各団体のための編曲や作曲も行ってきた。

現在は男声合唱団グランフォニックをはじめとしていくつかの団体の指揮やアカペラ講座の指導、及びクラシックからポピュラーまで幅広いジャンルの作曲・編曲などの音楽活動を続けている。

2002年からは多感で繊細な金子みすゞの一連の詩に取り組み、これまでに三十数曲の独唱曲と女声合唱曲を作曲。その一部はCD録音と楽譜として発表している。

小林研一郎氏に師事。



早瀬 洋子：ピアノ・チェンバロ

愛知教育大学 大学院修了。名古屋二期会、名古屋オペラ協会、名古屋市文化振興事業団、愛知県文化振興事業団、三重オペラ協会、岐阜県産業文化振興事業団、名古屋芸術大学の定期公演などで長年にわたり、多数のオペラ、オペレッタ、ミュージカルに、稽古ピアニスト、コレペティトゥーア、ピアノ公演ピアニストとして関わる。

男声合唱団グランフォニックの専属ピアニスト、若手音楽家の会「passo a passo」の音楽監督兼ピアニストとして7回のコンサートを開催、また、名古屋芸術大学ではオペラと大学院の授業でピアノを担当している。



若杉 弘子：ピアノ

愛知県立芸術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻。卒業ジョイントコンサート、リサイタルをはじめ、サロンコンサートや各地での親子のためのコンサートなどに多数出演。合唱、声楽などのリサイタルにおいてピアノを担当するなどアンサンブルピアニストとしても活躍中。

現在、音楽グループ Semplce(センプリーチェ)主宰。



毛利 美奈子：ソプラノ

名古屋音楽大学音楽学部声楽科卒業。ソプラノ歌手として、名古屋文化振興事業団 名古屋市主宰の「フィガロの結婚」、「天国と地獄」、知立市の特別企画「ヘンゼルとグレーテル」、名古屋音楽大学の記念公演「真夏の夜の夢」、長久手町文化の家主催「ラ・ボエーム」等のオペラや ベートーヴェン、モーツァルトの宗教曲のソリストとして出演し、好評を得る。

現在、声楽を小林史子氏に師事。刈谷市在住。

倉本 亜紗：ソプラノ

名古屋芸術大学音楽学部声楽科卒業。同大学定期、卒業演奏会、若いソリストのための協奏曲とアリア演奏会等に出演。第11回みえ音楽コンクール大学・大学院生の部第3位。馬場浩子氏に師事。

現在、同大学大学院音楽研究科1年在学中。この演奏会ではアルトパートを歌う。



宮崎 有希子：ソプラノ

香川県出身。香川県立坂出高校ピアノ科入学、2年時に声楽科に転科。

高校3年時にジュニア音楽コンクール声楽部門で銀賞受賞。声楽を川崎篤子、佐橋美起の各氏に師事。

現在、愛知県立芸術大学 音楽学部 声楽科4年。



グランフォニック

1994年5月、名古屋市でコンサートが行われた。主催は東海クローバークラブ（同志社グリークラブの東海地区のOB会）であり、そこに慶応義塾ワグネルソサイエティー男声合唱団、関西学院グリークラブ、早稲田大学グリークラブの東海地区在住のOBが加わり、グランフォニックの前身である「東西四大学OB合唱団東海」が産声を上げた。

その後2000年10月に「グランフォニック」と改称、四大学以外のメンバーも加わり、現在は50余名の団員で、週一回の定期練習と月一回の強化練習を行っている。

わが団は、「グランフォニック商事」というバーチャルカンパニーの形態で経営されている。経営理念は「歌を通じて生きる喜びを感じ、伝えること」であり、経営方針として、「より高度な水準の男声合唱を目指す」、「創作・編曲に限らずオリジナル作品を必ず発表する」、「ドイツ語の曲をキチンと歌う」を掲げている。

メンバー

**T<sub>1</sub>** 伊藤 高潤 岡本 達幸 鹿住 誠  
片田 保彦 神谷 立正 小林 武  
佐々木正義 田中 良夫 常川 浩  
早矢仕英史 藤田 東一 三ツ松 平  
山下 純也

**T<sub>2</sub>** 新谷 岳史 飯田 公男 石井 清  
伊東 健光 井上 恵太 小林 信夫  
佐藤 正 柴田 道昭 中村 嘉夫  
林 功 間瀬 譲 三ツ口勝弥  
森重 雅夫 吉居 清

**B<sub>1</sub>** 浅野憲一郎 伊藤 慎二 神田 久嗣  
木全 和明 土岡 一郎 寺島 正晃  
永井 一美 中田 聡 長谷川利孝  
早澤 信昭 細江太喜雄 水野 邦明  
安田 俊哉

**B<sub>2</sub>** 浅井 良之 浅田 宏 犬塚 弘道  
井ノ口貴敏 小嶋 聡 外村 俊夫  
富田 敏夫 林 和宏 福澤 慶太  
藤山 祐司 古田 和則 間瀬 裕士  
松原 成憲 村井 襄介

スタッフ

団長兼コンサートマスター 田中 良夫  
指揮者 向川原慎一  
副指揮者 神田 久嗣  
幹事長 細江太喜雄  
楽典長 伊東 健光  
副幹事長 林 功  
鹿住 誠  
財務部長 伊藤 慎二  
広報 (HP) 石井 清  
顧問 三ツ松 平

パートリーダー

T1 藤田 東一  
T2 新谷 岳史  
B1 中田 聡  
B2 富田 敏夫

パートマネジャー

T1 小林 武  
T2 中村 嘉夫  
T3 寺島 正晃  
T4 古田 和則

# THE GRANPHONIC CONCERT 7th

総合演出：岩川 均

舞台監督：北本 梓

演出助手：鈴木 香里

照 明：石原 福雄

衣 装：下斗部雪子 (制服レンタル 東京衣装)

# THE GRANPHONIC CONCERT 7th

グランフォニック 第7回定期演奏会

客演指揮に畑中良輔、朗読に伊藤京子 両氏をお迎えして…

## Stage 1

### 「Liebeslieder」(愛の歌)

作曲：ブラームス  
編曲：福永陽一郎  
構成：グランフォニック

指揮 向川原愼一  
ソプラノ 宮崎有希子  
アルト 倉本 亜紗  
ピアノ 早瀬 洋子  
若杉 弘子

## Stage 2

### 「水のいのち」

作詩：高野喜久雄  
作曲：高田 三郎

客演指揮 畑中 良輔  
朗読 伊藤 京子  
ピアノ 早瀬 洋子

## Stage 3

### ミュージカル「学生王子」

作曲：ロンバーグ  
脚本・演出：岩川 均  
編曲・構成：グランフォニック

指揮 向川原愼一  
ソプラノ 毛利美奈子  
ピアノ 早瀬 洋子

総合演出 岩川 均



畑中 良輔



伊藤 京子

2006年11月11日(土) 名古屋市民会館中ホール (金山総合駅下車すぐ)

15:30開場 16:00開演 指定席：3,000円 自由席：2,000円

お問い合わせ：細江 TEL：090 (1244) 2234 THE GRANPHONIC：http://www.granphonic.com